發行日二回
每月　一日　十五日
編輯兼
發行人　小林庫二
福島縣石城郡四倉町
中町四十一番地
發行所　四倉新報社
福島縣　石城郡平町田
町三十一番地
印刷所　一〇活版所
本紙定價一部拾錢
月貳拾錢（年二圓）

政局の現狀

目下の政局が、不安に滿ちて居ることは、何人も認めるところであるが、此の不安が如何なる形式によつて具体化するかと云ふ事は、何人でも豫測は出來ないのである。

局外人のみならず政治家自身する焦慮するばかりで、焦慮から脫する方法に何の成算もないのである。

憲政會の言ふ解散と言ふ事は無思慮と考いないものは一人も無いと思う。

憲政會としては一日も長く現狀のまゝ行かんとして苦慮して居ると考へるのが當を得て居るらしい。

憲政會には本黨と五十一議會の腐れ錄もあり又研究會ご云ふ幇間式存在もあることだから、出來るだけ是れ等を有利に利用し多少の犧牲ならば喜んで提供すると思われる。

まだ一年もある筈の壽命を自ら絶つやうな事があるとは思われない。

政友會が解散を招くやうな形式方法に於て、政府と正面衝突するの決心があるやも疑問である。

五十一議會には決心が全然なかつたし五十二議會に於いて無理に決行するやうな傾向はあるが此れも解散後の準備が出來なければ。輕々しくも出來ないのである

五十二議會の解散の鍵は、五十一議會と同樣に本黨か握つて小る事になるか五十一議會の如き改策本位の看板では二度國民を瞞著する事が不可能であるのである

床次氏が聯立內閣を拒絶したる事は本黨の分裂と云ふ事か原因して居るらしい、

かくして政局は危險を包みつゝ進行しつゝあるのであるから表面の事實とするきつかけがあれば時局は轉開するかも知れない。

而し何れの既成政黨でも總選擧を恐れてゐるのである

勞資の協調に就て

江尻中

（小林君が、四ッ倉新報を創刊するに就き、予に向て勞資の協調を書けと、申込で來た、予淺學寡聞現今の勞働問題を解決すべき程の抱負の持主でない、然し斷るのも禮を失するから、卑見を述ぶることゝした大方の讀者諸君及先覺者等に於て予の誤見を訂すあれば幸甚々）

(1)

勞働問題と云ふものは、機械の發明に依り、所謂產業革明の結果として、機械工業の勃興に伴ひ、一方には資本を投じて大企業を經營する資本家階級なるものを生じ、地方には資本をもたぬため勞力を賣て生活する所謂賃銀勞働者なる階級が生れたのである、然して資本家階級の側では、なるべく事業を擴張して、より以上の利益を得たと云ふ考へから、盛んに資本の增殖、事業の發展を企圖し、勞働者階級では、資本家が利益を隋斷して驕奢な生活を營むに引き替へ、自分等が利益の分配にあづかること薄く、然も何時まで經つても其の薄倖な境涯を脫脚することが出來ぬのみならず經濟界の暴氣、不景氣に伴ふで、失業の不安を感ずること又一通りでないと云ふ狀態にあるために、近時漸く階級意識に目覺めて來て、勞働者は階級的に團結して資本家に對抗し、地位の向上を圖らんとする運動が起り、中に急進思想を有する者等は、國家社會を呪ひ、其の組織を根本的に破壞せんと企てる者さへ、生ずるに至つたのである、斯の如き趨勢になり行くは、資本主義的經濟組織の社會にあつては、自然の勢で、これは畢竟、歐洲に於ける個人主義の思想と、物質文明の缺陷より生ずる產物なのである。

(2)

然らば此の不安を如何にせは除き、調和を圖り得るか此の問題の觀決には、種々樣々の意見も議論もある樣であるが、先つ利益の分配をもつと公平にして、勞働者の待遇の改善、地位の向上を圖り、又國家としては種々社會政策的施設を實行して勞働者の幸福を增してやり、貧富の懸隔を緩和することは固より極めて必要なることであるが、これのみでは根本的解決は出來得ないのである。

凡そ物には表裏即ち兩面があるので、此の人類社會にあつても、物心兩面から觀察しなければならぬ、然るに現今の社會は餘りに唯物的思想に墮して、精神的方面を無視してゐる傾向がある、殊に勞働問題の如きは其影響に支配されてゐることが、一層甚だしき感がある、此の問題の裏面には利益問題の外、人格尊重と云ふ深い、意味が潜んであることを見逃す譯には行かぬのである、彼のラッセルの如きは、頻りに心的改造の必要を力設して居る、况んや西洋と東洋とは古來社會の思想及び文明の基調に各々異つた特色を持つて居つて、此の特色を閑却しては社會問題の解決は出來ぬものである。即ち西洋の社會は個人主義の上に築かれ、それが權利思想に依つて維待されてをり、其の文明と云ふものは、物質主義科學萬能的思想の下に發達し來つたものである、之に反して東洋の文明は精神的主義人格的思想の下に發達し、殊に我が國に於ては家族制度の上に築かれて、服從觀念が根本をなしてをる、其結果として、西洋人は自然理智的であり、打算的であり、機械的であるのに、東洋人は精神的であり、道德的であり、人格的である、兎に角長い歷史に依りて、慣習つけられた民族的特色を否定することは出來ぬのである。

(3)

元來權利思想は、鬪爭我利と云ふやうなものから、發達して來たものであるから權利の主張が、やがてそこに鬪爭するのは、見易さ道理である、西洋の權利思想に對する、我が國の特色の服從の美德である、服從と云へば何んだか屈從を意味し、壓迫を感じ、人格を傷けらる樣に思はるゝが、我國に於ける服從の意味は、君父の恩に感じて、自己の本分を盡すと云ふのであつて、そこに些しの壓制とか苦痛とかを感せず、寧ろ叓心の滿足を以て、自ら進んで自己の務めを果すのである、他から强られる、屈從とは意味を異にし、所謂感恩報謝の念に出づる人格的精神的のものである、そこで權利思想が鬪爭的なるに對し、服從は和合的である恩義に感じて、其本分を盡し合ふ所に鬪爭のあるべき筈がない。

近年我が國民が西洋文明に感染して、極端なる個人主義に墮し、唯物質的思想に偏する傾あるは、予の深く遺憾とする所である、予は勞資の協調と云ふことは、我が國有の美風たる人格主義的服從觀念に依らなければ、眞實の協調は出來まいと思ふ、即ち資本家は、勞働者があるがための資本家である、其の地位と名譽とは一に勞働者のお蔭てあると云ふ其恩義に感じ、己みがたき熱情に燒ゆるならば勞働者の[illegible]でも、資本家の熱情、進んでは其恩義に感せぬ道理はない、こうして互に報謝的にやつて、そことに初めて眞の協調が得らるゝのである、勞資が圓滿に協調すれば、能率も隨て增進し、延いては國家の產物も亦自然に發達して行くのである、これに反して勞資兩階級が反目して、爭爭を始むるならば、啻に相互の不利を招ねぎ國家產業の發達を害するのみならず階級間の隙間に乘じて赤色の魔の手が入し來るのである

祝創刊
久の濱商事倉庫會社
頭取　堀部留造

祝創刊
御料理旅館
新藤屋本店
平町　電話四五九番

御料理旅館
新藤屋支店
平驛前　電話一四八番

祝發刊
磐城炭礦鑛業所